

# 先学を偲ぶ

## 誠実にご生涯を全うされた佐々木教悟先生

小 川 一 乗

法名 泰斗院釈教悟（俗名 佐々木教悟） 享年九十歳（二〇〇五年九月二九日入滅）。

先生は、九十歳というご高齢ながら逝去されるまで、矍鑠としておられました。ご承知のように先生は奥様に先立たれて以後、一人暮らしの生活をされていましたが、そのような生活が無理となられて、ご逝去になる年の春に「近

江温泉病院」という施設に入所されました。それで、六月の末にお見舞い方々「ご機嫌伺いにお邪魔しましたところ、お話を交わしても頭脳明晰であり、足腰の衰えを防ぐために軽い運動もされているということでした。それから僅か四ヶ月後のご往生ですから、枯れ木が折れるようにして大般涅槃に入られたことでしょう。

このような先生でしたので、その人生の臨終に至るまで、さまざまなお役目の現役として私たちを指導して下さいました。真宗大谷派の僧侶としては、正覚寺住職として責務を全うされ、宗門においては、一九八六年には宗門におけ



最高の学階である講師となられ、一九九四年には宗義及び聖教に関する重要事項を審議する董理院の董理院長となられ、翌年には、それまでは宗門の擬講以上の学階を有している方々の集まりであった真宗同学会が宗門の学会として再出発した真宗大谷派真宗教学学会の会長とされました。また、宗門の最も重要な学事である夏安居の本講を三度（一九八二年度、一九八六年度、一九九一年度）勤められました。が、いずれも宗祖親鸞聖人の主著『顕浄土真実教行証文類』（方便化身土文類、証文類、信文類）を講本とされるなど、宗門における教学の最高責任者としてご生涯の最後の最後まで尽力されました。

大谷大学においては、一九三七年に大谷大学を卒業され、その後、同大学の教員となられ、その間、学生部長、短期大学部長、学監・文学部長を歴任されました。一九六二年には文学博士の学位を取得され、一九八〇年に定年退職されて大谷大学名誉教授とされました。さらには、一九八八年からは十七年間の長きに亘って大谷大学の同窓会の会長として、私の知る限りでは、突発的な事態が起こったときを除いて、あらゆる同窓会の会議・会合には誠実にご出席になり、同窓会の発展のために先頭に立たれていました。

先生からいただいた学恩を思うとき、先ずはじめに、ご法名の泰斗院という院号が先生の学問を示唆していると伺うことができます。「泰」とはタイ国のことであり、この字からは、一九四三年から一九四六年にかけてタイ国仏教文化調査研究のためにバンコクに留学し、上座部仏教の研究に励まれた若き日の先生のお姿が浮かんできます。そのときのタイ仏教の僧衣を身にまとった見習僧姿の先生のお写真を拝見したとき、その美男子振りに思わず感嘆の声を上げたことが思い出されます。それから「斗」とは、お聞きするところによると、「北斗七星」のことであり、それには「その道にすぐれた人」という意味があり、学問を一生懸命にする人ということで、タイ国の上座部仏教の研究が先生の学問の出発点であり立脚地であったことが、この院号によって示されているからです。

先生から直接に受けた学恩を思い出しますと、一九五五年に大谷大学に入学した私は、二回生になって先生の

「パーリ語文法」の授業を受けました。その時は、先生は助教授になられた翌年であり、将来の仏教学科を担う若き教員として学問に情熱を傾けておられた時ではなかったかと思われます。私は出席率の悪いきわめて不真面目な学生であったにもかかわらず、単位の評点が「優」であったのには私自身が驚いたことをいまでも憶えています。その後の私の研究においてパーリ語文献に接する機会が少なく、パーリ語はさっぱり身に付かなかつたことを思いますとき、先生の期待にそえなかつたことを、先生とお会いするたびに私は胸の中で恥じていました。それから「仏教史概論」の授業では、先生の『仏教史概説 インド編』（共著、平楽寺書店）がテキストに使われ、親切で分かり易い講義を楽しく受講させて頂きました。仏教学科の専門科目としては、先生はその当時あまり研究されていませんでした義浄の『南海帰寄内法伝』を講読され、その授業の中で、玄奘の『大唐西域記』のチベット訳をも参照され、それが大谷大图书馆に所蔵されていることも知りました。ちなみに、この『大唐西域記』のチベット語訳は手書の文献であり、世界に唯だ一本しか存在しない稀覯本であるため、後に（一九八八年）、大谷大学所蔵西蔵蔵外文献叢書シリーズ（五冊）の劈頭を飾る第一冊「西蔵語訳『大唐西域記』原本複製付漢文原典並解説」（臨川書店）として影印刊行されましたが、その解説を先生にお願いしたことです。大学で先生の授業を受けましたのはこの程度にしかすぎません。私はインド・チベットの仏教研究を基本としていましたので、卒業論文や修士論文の試問でも先生のご指導を受けることがありますでした。

しかし先生は、私の恩師である山口益先生の門下生であり、その点では門下生の先輩でありましたので、研究室や教室以外のところで、山口先生を囲んでの会合では屢々一緒にになりました。先生が山口先生と共に SYLVAIN Lévi: *L'Inde civilisatrice* (Paris, 1938) の和訳に取り組んでおられることを知ったのもそんなある時でした。それが、山口益・佐々木教悟訳註『インド文化史』（平楽寺書店）として刊行されましたのが、私の四回生のときでした。それを読みまして、山口先生の『般若思想史』（法蔵館）の最初の部分が、この SYLVAIN の著作に基づいていることを知

りました。

先生の学問業績として、他の追隨を許さないのはタイ国の上座部仏教の研究であり、それを基本とした研究は、『戒律と僧伽―インド・東南アジア仏教研究 1』『上座部仏教―インド・東南アジア仏教研究 2』『インド仏教―インド・東南アジア仏教研究 3』の三部作（平樂寺書店、一九八五―七年）として結実しています。加えて、『南海帰寄内法伝』についての研究も『南海帰寄伝講要』という宗門の夏安居での次講の講本（一九六八年度）として出版されています。

最後になりますが、先生はご逝去になられる前年まで龍谷大学の非常勤講師をされていました。大谷大学の同窓会の会議や、宗門の董理院の会議、学階銓衡会などでお会いすると、何時も「まだ龍谷大学に行っているのですよ」と、自慢げというよりも楽しそうに仰いまして、そこからは学問に対する失われることのない情熱を感じざるを得ませんでした。また、私事ですが、私の拙い『仏教思想論集』（四巻、法蔵館、二〇〇四年）が出版されまして、先生に贈呈させていたできておりましたが、第三巻の「中観思想」を贈呈したときには、「あれはなかなか読み応えがありますね」というお言葉があり、大変驚きました。私のような者の拙著にまでも目を通して下さっている、その強靱な意志力と学問に対する情熱とに敬服しますと同時に、それを可能にしているのは先生の誠実なお人柄に他ならないと頭が下がりました。これをもって「先学を偲ぶ」追悼の言葉といたします。